

絵本の力

一歳児クラスの新学期が始まって二日目のことです。その日は、持ち上がりの私と新人の保育士とで、ゼロ歳児クラスからの進級児五人の子どもたちをみていました。まだ、新しい保育士になじめず、おむつ交換も着替えも私のところに来てしまう子どもたちでした。

食事が終わって、自由に遊んでいるとき三人の子どもが本箱の前に座って、絵本を開いて見ていました。ゼロ歳児の時から絵本に親しんでいた子どもたちで、絵本は大好きです。私はその姿を見て、若い保育士に、「絵本を読んであげて。」と、頼みました。一冊二冊と読み続けていると、おむつ交換も着替えもさせようとしなかった子どもたちが、その若い保育士にだんだん近寄ってきて、膝に乗って抱っこされているのです。安心して体を保育士にゆだね、絵本を読んでもらっている子どもは、一生懸命読みながらも、うれしそうに若く保育士の顔。その光景を眺める私は、「これが絵本の力なのか!」と、感動していました。

おおつか保育園（栃木市） Hさん

母から子へ・絵本をとおした家族のつながり

私が子どもの頃は、絵本を見るとか読んでもらおう等という事にはあまり関心がなかった様に記憶しています。保育所に一年間通った時には、先生が、毎日紙芝居を見せてくれた事をよく憶えています。中でも『さるかに合戦』『親指姫』『かちかち山』等の古くからのものがほとんどでした。そんな毎日の生活の中で私が楽しみにしていた事が一つあります。それは、母が寝る前に、布団に横になり、私たち三人の子どもに毎晩同じ話を聞かせてくれたことです。そのお話は、今でもよく憶えています。母が話してくれたたとおりに話す事ができます。私が大人になつてから知った事なのですが、その話は、絵本にある話だったので。『へこきよめさま』というお話で、どうして母がその話を知っているのか不思議に思い、聞いたところ、祖母に教わったという事でした。そんなに古い話が絵本になつている事を知り、またそれを母から毎日聞かされて、眠りに就いた頃の自分を今思うと、祖母から母へ、母から子へと伝えてもらったことに幸せを感じずにはいられません。あの当時は、母も私たちもその話が始まるともうおもしろくて大笑いでした。絵本はなかったけれど母の話には、暖かいぬくもりがあり、絵本を読んでもらっている様でした。毎日何かしらの話を聞かせてくれた母に今でも感謝しています。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる（河内町） Sさん

絵本との出会い

ノントンシリーズは、私の好きな絵本で絵もかわいくて内容もわかりやすく子どもたちも大好きです。この絵本『ノントンぶらんこのせて』にでてくる光景は、保育園にもよくある光景です。ブランコを一人じめして、他のお友達も乗りたいのにブランコを貸してくれないで一人で乗っている様子が描かれています。園でもブランコの数は三つしかなく、みなとても喜ぶ遊具の一つでした。室内から外にでた時に、一目散にブランコに走っていき乗っている子が何人かいました。最初に乗った子はずっとブランコに乗っていて「順番だよ」と言ってもなかなかブランコを貸してあげられない状態でした。そんな時出会ったのがこの『ノントンぶらんこのせて』で、待っているお友達が乗っているお友達のブランコの数を十数えて、最後に「おまけのおまけのきしゃポッポ」と鳴ったらかわりましょう」の合図で次のお友達にブランコを貸してあげるといってお話でした。そのお話のように乗っているお友達のブランコを数えていると待っているお友達もあきずに「おまけのおまけのきしゃポッポ」と鳴ったらかわりましょう」と言って待てるようになり、ブランコに乗っているお友達も十回乗っておまけがついたら、交替するんだとわかるようになりました。ブランコも楽しみながら交替して遊べるようになりました。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Iさん

絵本について

私が小さい頃から両親はよく絵本を読んでもくれました。母がよく「私が三人の子を抱え、保育園の仕事と家事をしている中で、我が子にしてあげられたと胸を張って言える事は食事(特に朝食)をきちんと作ってあげた事と絵本を読んでもあげた事。」と言っているくらいで、幼な心にも、夜寝る前に眠りそうになりながら絵本を読んでもくれた両親の姿が記憶に残っています。私が一番記憶に残っている絵本は、『ピーターラビット』。かこさとしさんの『ニンジン畑のパピペポ』や『おたまじゃくしの一〇一ちゃん』等もよく覚えていました。

今、大人になってみて、実感はありませんが、自分の想像力や表現力、情操等の面で、それが生きているのかなと感じる事があります。また、今現在、本が好きなのは、小さい頃に両親がたくさんの絵本を読んでもくれたお陰だと思えます。

先日、作家の柳田国男さんのお話を聞く機会がありました。

「絵本は、読み聞かせ肉声を通し気持ちや感情、表情を伝えるコミュニケーションである。」「大人でも絵本を読む事によって、忙しさを忘れていた感性がよみがえってくる。心が再生する。」という話が、とても印象深く残りました。

今後自分も園児たちと一緒に絵本を読みながら、園児たちの心と自分の心にも様々な感性を伝えていきたいと思えます。

また自分が子どもを持ったら、私の両親の様に絵本をたくさん読んであげたいと思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Yさん

伝えたい絵本

私は、絵本が大好きな子どもだったと、母から聞かされたことがあります。今、思い出してみても、絵本を読んでもらったという記憶が全くといっていいほどありません。しかし、一冊だけ何度も何度も喜んで読んでいた絵本を覚えています。それは「ノントン」の絵本です。この本だけが記憶に残っていることが不思議でなりません。それだけ大好きな絵本であったのだと思います。この「ノントン」シリーズの絵本は二冊ありました。表紙がピンクなのは私、赤は妹。私はそのように自分の絵本を表紙の色で区別していました。一人一冊買ってもらったおかげか、このピンクは私の絵本なんだ、という思いが強くありました。妹と同じ、ノントンの絵本。だけどこのお話は私だけのもの、ということがとても嬉しく、そのことがこの絵本を大好きにさせてくれたのではないかと思います。

そして今、保育士となった私は、自分の感じた思いを子どもたちにも感じてもらいたいと思い、大好きなノントンの絵本の読み聞かせをよくします。初めて子どもたちにノントンの絵本を読んであげた時の子どもたちの反応が、とても印象深く残っています。絵本を見せたたん、子どもたちのざわつきがおさまり、嬉しそうな目をして絵本に注目していました。自分が子ども頃の好きだった絵本を、今の子どもたちも同じように好き、と感じていることがとても嬉しく思えました。「読み手の、この絵本が好き、という気持ちは聞き手に伝わる」とおっしゃっていた方がいました。自分が絵本を読んで感じた思いを、これから絵本を通して子どもたちにも伝えていければいいな、と思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Kさん

絵本への思い

私は幼かった頃、毎晩寝る前に母親に絵本を読んでもらっていました。特に「ねないこだれだ」や「ぐりとぐら」は、お気に入り、絵本の内容を覚える程まで、読んでもらっていました。

現在、私は保育士として子どもたちに絵本を読んでいます。私自身、絵本を読むのも見るのも大好きなので、絵本と関わっている時間は、とても楽しいです。不思議なことに、絵本を読んでいると幼かった頃と同じ気持ちに戻れるような気がします。子どもたちも絵本を見ている時は、その絵本に入り込んで物語を楽しんでいるようです。また、落ち着いた表情も見せてくれます。

今日、ビデオやテレビを長時間視聴している子どもが沢山いるようです。だから、保育園にいる間は、様々な絵本を子どもたちに読んであげ、絵本の楽しさ、おもしろさを伝えられたいと思います。

こうして私が絵本に親しみを持てるのも、母親のお陰だと思っています。今、私たち姉妹が読んだ沢山の絵本は押し入れに入っています。私が将来母親になった時には、自分の子どもにも沢山の素敵な絵本を読んでもらいたいと思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Aさん

絵本と出会うことで

日常の保育の中では朝の会、午睡前、帰りの会、または板橋先生がいらしてお話や絵本の読み聞かせをして下さる「お話聞かせて」という日があります。

そのため保育士が絵本を持って部屋に入ると今まで遊んでいた子どもたちが、自然と保育士の周りに集まり「今日は何のお話だろう」という期待の眼差しでこちらを見ています。

楽しい話の時には笑みを浮かべたり、少し怖い話や悲しい話の時には眉間にしわ寄せ心配そうな表情をしながら聞いていました。保育士が声色や声に強弱をつけると子どもの集中力も高まり、より色々な反応が子どもたちから見られて私自身も絵本の読み聞かせを楽しんでいます。

昨年に三歳児の劇の練習にと毎日読んでいた『おおかみと七匹の子やぎ』も一緒に話をくり返し聞いていた二歳児の子が「トントンお母さんですよ。」などのセリフを覚え、戸外遊び中に劇遊びを楽しんでいる姿が見られました。そして飽きることなく、

「おおかみがいいよ。」
と言つて同じ本をリクエストする子どもたちに、絵本から受けるイメージや印象は大きいんだなと感心しました。

今のTV世代の子どもたちは、就寝前までTVからの音や強い光の刺激を受けている環境の中で育てられている子が多い様ですが、同じ物語にしてもTVからの「音」ではなく「声」を絵本を通してもつと聞かせてあげて欲しいと思います。

私の母が昔「絵本を読んでもとすぐ寝ちゃうよね。」と言っていた事があり、子どもながらに悪い事をしたなと思つた時も

ありましたが、保育園に勤めてからは、それは自分にとって心地よいと感じていたからなんだと知ることができました。私がかつても日常生活においても母の「声」が好きだと感じるその背景には、絵本を通じた親子の関係を経験してきているからだと思います。

もし、子どもと一対一でおもちゃを使って遊ぶ時間があればおもちやを絵本に代えて、ひざの上に抱っこしながら一緒に見たいと思います。絵本を通して二人だけの空間を作ること十分なコミュニケーションもとれ、母の声を心地よいものなんだと感じられる環境が増えていつて欲しいです。

絵本を取り入れた保育の中で大きく変わったなと思うことがあります。

それは、昨年は「お話聞かせて」の時間にうわの空だったり、後ろでさわいでみたりと落ちつかない子たちがいましたが、今では自ら一番前に座りじつと集中してお話を聞いている姿が見られるようになりました。同時に人の話もきちんと聞けるようになり、毎日の絵本を通じた生活のくり返しの中で、自然と「聞く耳」が身に付いたのだと感激しました。

保護者の方からは「ひらがなが読めるようになったけど保育園で教えているのですか。」などの声もありました。練習帳などの教材を用いるよりもたくさんさんの事を楽しみながら学ぶことができる絵本は子どもたちが成長する中で大切な教材に代わるものだと思います。

これからもたくさんさんの絵本に子どもたちが出会えるようにしていきたいです。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Nさん

絵本の読み聞かせから

絵本、それはいろいろなものを与えてくれる素敵な世界だと思っ。

私は幼い頃、母親が毎晩寝る前に絵本を読んでくれた。今でも絵本を読んでいる時の母親の優しい口調を覚えている。私は絵本によって母親の優しいぬくもりを感じる事ができた。

日々子どもと接する中で、子どもと絵本のつながりについて様々なことを感じ始めた。

午睡前、毎日必ず読んでいた絵本があった。そのなかで登場する雲が「でんでら、でんでら」と話す場面があった。繰り返し読んでいた中で子どもたちはその言葉を覚え、雲の絵を見ると、「でんでらいたよ。」

と言うようになった。

また、電車の絵本に「がったん、ごつとん、ピーポッポー」というフレーズがあった。すると子どもたちは遊びの中でそのフレーズを取り入れるようになり、ブロックで電車を作っては、「がったん、ごつとん、ピーポッポー」と言いながら電車を走らせていた。

これらの体験から、子どもたちは絵本から豊かな表現を身につけているのだと強く感じた。

絵本は言葉を身につけていくためにとても大切なものであり、さらに豊かな感情を身につけるためにも必要なものだと思う。そして保育の現場にたつ者として毎日かかさず読み聞かせていきたいと思う。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Yさん

私が一番好きな絵本

私自身が、今までに出会った絵本の中で、心に残る絵本は、数え切れない程、沢山ありますが、「どれが一番？」と問われると、迷うことなく、「ぐりとぐら」を挙げたいと思います。

学校を卒業してから(もう三十年以上も前の事となりますが)初めて、保育園者として出会った本で、私自身、この絵本を手にした時、とにかく、赤と青のおそろいのズボンをはいた野ねずみの、ぐりとぐらの可愛らしさに、心を奪われてしまいました。また、森の中の、草や、花や、動物たちの姿に、何ともいえない親しみを覚えました。

ページをめくっていく度に、森の中で、真白な大きな卵を見つけた二匹の野ねずみたちが、次に、どんなふうになつていくんだろうかと、心がワクワクし、だんだんと心がぽかぽかと温かくなつて来て、その当時、若かった自分が絵本の世界の中に入り込んでしまったという様な記憶があります。

「ぐりとぐら」「ぐりとぐら」と言う言葉のくり返しも、リズムがあつて楽しくて、あの時の子どもたちも、目を輝かせ、耳を澄まして、じーっと見入ってくれていた様に思います。そして、子どもたちの帰った後、自分の受け持った教室の壁紙に、ぐりとぐらのお話の中から、好きな場面を、一生懸命真似て描き、飾ったことを思い出しました。

私自身、大好きなお話の絵だったので、自分なりにとても満足し、子どもたちからも、

「先生、すつごく可愛いね！」と喜んでもらうことができました。

遠い昔の事です、今でも私の心の中でほのかに息づいてい

る絵本にまつわるエピソードです。

あの時の子どもたちも、お父さんお母さんとなって、自分の子どもたちに、自分の受けた感動を次の世代へと伝えていくてくれたら、どんなにすばらしい事でしょう。

絵本が与えてくれる、夢や、希望や、感動を、これからも、子どもたちと一緒に楽しみながら、私自身も心を豊かに膨らませていきたいと、そう心より思います。

ゆりかごきつず・なーさりーすくーる(河内町) Mさん

Y先生の思い出

Y先生は私が小学校四年生の時の担任でした。いつも手遊びを教えてください、クイズを出してくれたりして、楽しく授業をしてくださいました。その一方では社会に目を向けるために、よいテレビ番組をどんどん見るように勧めたり、日記指導を通して、「ものの見方・感じ方・考え方」を指導したり、児童のやる気をうまく引き出してくださいさる先生でした。

そんなY先生が特に力を入れていたのが読書指導です。先生の「読み聞かせ」や、「ブックトーク」が今の私に大きな影響を与えたように思います。先生が読み聞かせをしてくださった本のなかで、『千葉省三』が心に残っています。省三は明治二十五年生まれ、子ども時代、私の郷土である鹿沼市に住んでいた童話作家です。以前、省三の作品『鷹巣取り』や『チツクとタ

ツク』は小学校の教科書にも載っていました。Y先生は省三の童話の中に出てくる鹿沼弁で生き生きと朗読し、私たちを童話の中に引き込みました。また、実際の童話の舞台(鹿沼市榎木町)にも連れて行ってくださいました。先生の影響を受け、小学校の教師になりたいと思った私は、十三年後その夢を叶えました。

教師になってからも、私はY先生のご指導を毎日のように受けました。なんと先生は私が赴任した小学校の教頭先生だったのです。「世間は狭い！」そう思いました。

四年前、私は鹿沼市立東小学校で四年生を担任しました。社会の授業では、郷土の文化に尽くした人として「千葉省三」が取り上げられていました。「私たちの鹿沼市」という副読本にはY先生の似顔絵がのっついて、「千葉省三研究者Y先生のお話」とありました。「へー、Y先生って有名なんだ。」と思いました。担任していた子どもたちにY先生のことを話すと「ぜひ、Y先生の授業を受けたい。先生お願いして。」と言います。Y先生は当時、校長先生を経て退職されていました。百二十名の児童に校外で三日間に分けて授業を行うのは簡単に実現することではありませんでした。しかし、どうしても自分が味わった感動を子どもたちに味わわせたいと思い、いろいろなハードルを乗り越え、Y先生を迎えた「千葉省三のふるさとを尋ねて」という授業が実現しました。四年生は三クラス百二十名でした。先生は「どんなに多くても一クラス単位でなければ授業をしない。」とおっしゃって、三日間子どもたちといっしょに路線バスに乗って榎木町の現場まで行き、省三のふるさとを案内してくださいました。私が子ども時代に経験したような忘れられない授業になりました。Y先生は最後に、『とらちゃん日記』という童話に出てくる橋のふもとで、童話の一部を読んでくださ

いました。「とらちゃんはどうちから来たんだい？」Y先生の質問に子どもたちは目を輝かせて、「あっちー」と指さしながら答えていました。私はこの時の子どもたちの生き生きとした表情が、今でも忘れられません。

次の年、Y先生は急にお亡くなりになりました。お葬式の日、当時五年生になっていた児童百二十人、ほぼ全員がY先生に手紙を書いてきてくれました。「先生の授業が忘れられない。もっといろいろ教えて欲しかった。」「子どもたちの思いは私の思いでもありました。」

私は今でも、まだ先生が生きているような気がしてなりません。バイクに乗って突然現れ、自分の研究の話を始めるような気がするのです。私に本のすばらしさを教えてくれたY先生、本当にありがとうございます。

宇都宮市立富士見小学校 Tさん



本を通したいろいろな人との出会い

二年前に『きいちゃん』という本を通して、作者山元加津子さんとふれあいができました。障害があっても前向きに生きている主人公の姿に感銘し、その思いを、作者におたよりで伝えました。また、その本を子どもたちに読み聞かせたり、保護者

に学校だよりで紹介したり、友だちに本をプレゼントしたりしました。

作者に手紙を出して、一週間後、なんと、その作者から心温まる返事をいただき、感激しました。

そして、今年六月、その作者が、馬頭町で講演会をするということを新聞で知り、その町まで、講演を開きに行き、講演後、作者と話をすることもでき、また、感激しました。一冊の本を通して、このようないろいろな人との出会い、ふれあいができることは、偶然ではないような気がします。私にとってこの本は、宝物のように大切なものです。

これからも、感動した本をいろいろな人に伝えたり、感想を伝えあったりして、本を通した心のふれあい、つながりを深めていきたいと思えます。

足尾町立足尾小学校 Mさん

読み聞かせから広がった

国語の教員としての願いの一つは、本の好きな子どもたちを育てることでした。そんな私の心に残る出来事が、育児休業期間を終えて復帰半年ほどの頃がありました。

教材のあとには、時間が許す限り関係する物語の読み聞かせをしたり、プリントにして渡したりと、出来るだけ子どもたち

に本の世界を広げようと努めていました。それは、中学一年生の教室でのことでした。

二期の戦争教材の学習後、いつもと同じように、物語の読み聞かせをしました。野坂昭如の戦争童話集から『凧になったお母さん』の読み聞かせでした。

「昭和二十年、八月十五日」で始まる十二の物語の一つ。子どもに水分を与えるためにみずからは干からびてしまうお母さんの話。

教科書で読み取った様々な思いを、この読み聞かせから子どもたちが感傷や感動だけではなく、戦争の悲惨さや無意味さを新たな課題として受けとめてくれることを願って、また、時間的にもちよūdよい長さだったから選んだ物語でした。この胸をしめつけられる物語を子どもたちの前で淡々と読み終えるはずでした。感情を過度に入れない方が子どもたちに伝わるものが大きいはずと。

ところが、読み進めていくうちに声が震え、言葉がつまり、どうしても先に進めなくなってしまうのです。始めのうちこそ気を取り直して、先に読み進もうとしていたのですが、嗚咽おえつになってしまつて、読み聞かせからは、ほど遠いものになってしまいました。しーんと静まりかえつた教室。息を詰めて私を見守る子どもたち。どれほどの時間が経つたのか、短いとも長いともいえない時間が過ぎていきました。と、その時、一番前の席にいた男子生徒が、つと立ち上がり、私の手からその本を静かに引き取りました。そして、落ち着いた声で、物語の続きを読み始めました。声にはならなかつたけれど、フーッとホーッともつかない安堵の息が子どもたちの口から漏れました。私は涙したまま、その子の読む物語に聞き入りました。訥々とつとつとした音読でした。ですが、その子が読み終わったとき、誰から

ともなく拍手が起りました。

「ありがとう。ごめんね、最後までちゃんと読んであげられなくて。でも、君が読んでくれて、よかつた。本当にありがとうね」と言う私に、席に着きながら、その子は「K先生は、お母さんになつたばかりだから、かつちゃん（主人公の幼い男の子の名前）が自分の子どもと重なつたんだね。」とつぶやきました。うん、うんと頷く子どもたちが何人もいました。

本当は、戦争のもつ悲惨さや無力感、絶望感、そんなものを感じ取ってもらいたかつたのですが、このことで、母親の子どもを思う気持ちが子どもたちの胸に刻みこまれたようでした。どの子どもどの子どもみんな同じに、お母さんから大切に慈しまれて育ててきたのだと、子どもたちは感じとつていたように思われました。

そして、学校図書館では、その後しばらくの間、『凧になったお母さん』の貸し出しが増えました。また、これ以後、教材の後にする読み聞かせも、子どもたち自身が読んだり、子どもたちが探してきてくれて紹介したりするということも出てきました。

本当に遠い昔のことですが、今もなおこの日のことは、私の中に鮮明に残っています。



中学校教諭

心の交流

「ねずみさん、どこにいるかな？」

こんな言葉から、私の初めてのブックトークが始まりました。私の勤めている学校では、月に一度、教職員やボランティアによるブックトークが行われています。初めてのブックトークで割り当てられた学級は、情緒障害児のクラスでした。事前に担任や司書教諭にアドバイスをいただきました。『7ひきのねずみ』という絵本の読み聞かせを行いました。文章はあまりなく、絵がメインの絵本。彼らにとっては、何度も読んだことがある本だったのですが、目を輝かせ、身を乗り出して聞いてくれました。いつの間にか緊張もほぐれ、とても楽しいひとときでした。

私は、これまで、読書は一人黙々と行うものという印象が強く、自分と本の一对一の世界であると思っていました。しかし、今回の出来事は、そんな私を大きく変えてくれました。実際に、私は、この本を通して普段接することが少ない彼らと交流し、とても楽しい時間を共有することができました。

たくさんの本に出会った子どもたちの頭の中には、記憶の引き出しがあり、そこには、本の世界に登場した数々の色や形、生き物、その他いろいろなもの शामिलされているそうです。この記憶の引き出しが、子どもたちの成長に大きく影響すると言われています。生徒の身近にいる私たちにできることは、ただ、「本を読もう」と言うのではなく、ブックトークなどの活動を設け、生徒にあった本を紹介したり、本を読むことの楽しさを伝えたりすることではないでしょうか。そして、そんな私たち大人の引き出しにも、たくさんの本の思いつきとともに、読み聞かせをした思い出も加わって、人生を豊かにしてくれるのかもしれない

せん。

今後、私に割り当てられたブックトークはあります。このクラスの生徒たちは、どんな本に興味があるのだろうか？ 話せば興味を持ってくれるのだろうか？ 疑問や悩みは尽きません。けれども、本を媒介として、たくさんの生徒と交流していきたいと思えます。

矢板市立矢板中学校 Tさん

それぞれの『道ありき』

「行動面で注意を要する生徒である。」一年次の担任から引き継がれたA子評である。しかし、実際の彼女は素直でひたむきな生徒であった。ただ、人に合わせようとして精神的に疲れてしまう傾向があった。彼女は、担任である私の所へよく相談に来た。ある日、私は彼女に三浦綾子の『道ありき』を貸してあげた。以後、三浦綾子の作品は彼女の愛読書になり、受験勉強が本格化するまで、私のもとに本を借りて来ては、作中の人物や生き方について話していった。

A子は英語が得意で、有名大学の外国語学部への進学を希望していた。彼女は元来まじめで、校内の学業成績は良好だったが、校外の模擬試験の成績は概して振るわず、懸命に受験勉強に取り組んでも志望校との距離は縮まらなかった。英検も二級

にもう一步で届かなかった。外国留学等のシステムで英語に力を入れていたB大学の関係者が、学校までスカウトに来たこともあった。彼女は推薦入学の条件や留学に魅力を感じつつも、本来の志望校を受験することにした。しかし、受験本番が近づくとつれ、ストレスから体調を崩してしまった。

そして三年生の二月。次々に届く不合格通知にA子は心も体も疲れきって、ついに志望校での受験の最中に倒れてしまい、合格通知を一つも手にしないまま入院してしまった。ようやく退院した彼女に、私はC大学国際関係学部の三月入試の受験を勧めた。前年に行われたC大学の説明会で、私はD教授の話を知っていた。D教授はフィールドワークを重んじた教育を行い、論文コンテストでは、世間で一流といわれる大学以上の受賞者を輩出していた。私はD教授ならば生徒を安心して預けることができるかと確信し、説明会の翌日のホームルームでそのことを生徒に熱弁していた。しかし、C大学は本校の生徒にとつてはいわゆる滑り止めで、積極的に受験する生徒は稀だった。現役合格が条件のA子は、試験日程が重複する有名女子大との受験に願書締め切り日まで迷った末に、C大学の受験を決意し、ようやく合格通知を手にする事ができた。

大学生となったA子は、しばらくして新生活についての便りをくれた。私が勧めたD教授のゼミに入ったこと。優秀な先輩に刺激されて勉学に励んでいること。順調な学生生活の出發を知らせる内容に、私は安堵した。

その年、平成十一年の十月、三浦綾子世界のニューヨークが報じられた。数日後A子から久しぶりに手紙が届いた。手紙は、ニューヨークを聞いて、高校時代に三浦綾子の本を紹介してくれた私を思い出したと始まっていた。作品から生き方を学び、今でも辛いことがあると『道ありき』を読み返すとあった。近況報告

には、学内で開催される「高校教育」についてのシンポジウムで、パネリストとして発表することになったとあった。発表では、自分がよき師やよき友、充実した授業や学校行事等に恵まれて過ごすことができた高校生活を、理想的な高校教育の例として語るとのこと。さらに、留学の学内選考試験にトップで合格し、奨学金を支給されてイギリスに留学することになったとあった。しばらくは不本意入学に鬱々としていたが、今は充実していると手紙は結ばれていた。

『道ありき』を心の支えにして、挫折を乗り越えて懸命に自分の道を生きようとするA子の姿と、本の持つ力の大きさに心打たれた。A子にとって幸多き『道ありき』であることを陰ながら祈る。

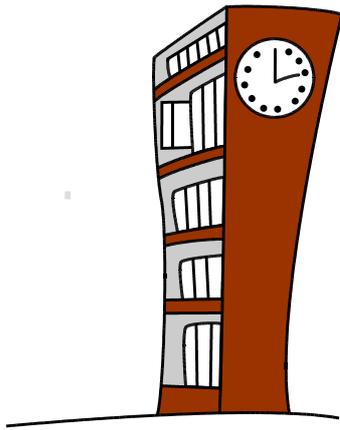
高等学校教諭

思い出

以前、自分の母校である高校を訪れる機会があった。その際、図書室を拝見させていただいた。私は高校在学中に本屋では文庫本などをよく買っていたが、高校の図書室で本を借りるということを一切しなかった。図書カードなるものは、真っ白であった。図書室には出入りするものの、「この図書室の蔵書数はすばらしい」などと先生から聞くと、「こんな所で借りるものか」などとすねていたのかもしれない。何をそこまで意地にな

つていたのかと思いつつ、書架を眺めていた。その時「T文庫」というものがあることに気付いた。Tとは、私が在学中に国語を担当されていた先生のことである。T先生は私が高校を卒業した後、高校在職中に亡くなられたということであつた。その先生の遺族の方が高校に寄付された一群の書籍を、「T文庫」と名づけ開架しているという。それらの本はT先生ゆかりの本ではあるが、それらの本を通しての思い出があるわけではない。しかし、不思議なものである。そこにある本を見てみると、これらの本はさもT先生らしい本であるなあなどと思われてくるのである。

私たちは、小説などを読むと登場する人に思いを馳せる。古典などを読むとこれを書いた人にも思いを馳せる。しかし、それらの人ばかりではなく、本として存在しその存在と関わった人にも思いを馳せる。母が子に本を読み聞かせれば、子は母を思いながらいつかその本を読み返すだろう。そう考えると当たり前の事ながら、本が持つ人と人を結びつける力に今更ながら気付かされる。「ものより思い出」などということも聞くが、外に出かけるだけが思い出作りでもない、なども思えてくるのである。



高等学校教諭

本の贈りもの

「やっぱり先生だ。」

その日は、看護婦をしている妻の職場の歓迎会の日だった。妻を歓迎会の会場まで迎えに行った私は、突然妻の同僚の一人からそう声をかけられた。よく見ると懐かしい顔。私がまだ大学院生で非常勤講師をしていた頃、県内のある女子校で教えた生徒だった。

「奥さんから名前を聞いて、先生じゃないかって思ってたんです。」

六年ぶりの再会に、ほんのちよつとの間ではあつたが昔話に花が咲いた。

高校で教えていたといつても、一年生二クラスの授業を週に二時間ずつ受け持つだけの非常勤講師であつたから、ほとんどの生徒の顔も名前もよくは覚えていない。それなのに、なぜその声をかけてくれた生徒のことはよく覚えていたかというところ、バレンタインデーにまつわるちよつとした思い出があつたからだ。

講師の任期ももう少しで終わりという頃、バレンタインデーに、その生徒から「義理チョコ」をもらった。当時、教員採用試験に合格し、四月から正式な教員としての生活が始まることばかりがわかっていた私は、何か教師らしいお返しをしなければとしばらくまじめに考え悩んだ結果、一冊の本を贈ることにした。灰谷健次郎の『わたしの出会った子どもたち』（角川文庫）という本だった。子どもたちと正面から向き合うことの難しさや大切さを教えてくれる本で、私が教員を目指すきっかけとなつた本のひとつでもある。ただ、今思えば、自分が感動した本だ

からという以外に、その本を贈る理由など全くなかったのだが。「先生からいただいた本を読んで、小児科で子どもたちの看護をするのもいいなって思っただけです。」

看護学校を卒業した彼女は、希望が叶って私の妻と同じ小児科に配属になった。今はまだ仕事を覚えるのに悪戦苦闘の毎日だが、子どもたち相手の仕事にとてもやりがいを感じていると言う。私の贈った本も、ちょっぴり役に立ったのかなと思った。



高等学校教諭

「舞姫」の朗読

私が前任校に赴任した時のこと。一年生の正担任ということから、授業は一年生中心に持つこととなったが、一クラスだけ三年生の現代文を担当することとなった。文科系の私立大学への進学を希望する生徒を中心とするクラスで、国語を得意とする生徒が多いクラスであった。新採から六年間勤務した別の高校では、文科系大学への進学を希望する生徒がいなかったため、

いきなり三年生の授業を持つというのは正直不安であった。

一週間でその不安は倍加した。「この子たちのほうが、自分よりずっと感性が豊かだ。もしかしたら、自分より読みが深いのではないか。こんな自分が授業を担当していいのか。」と。それからというもの、必死で教材研究に取り組んだ。生徒には負けられないとばかりに。さぞかし、肩に力が入った授業でもしるみのない授業だったと思う。

数か月過ぎてようやく力みも抜けた頃、森鷗外の『舞姫』を教材として扱うこととなった。第一時間目、私が朗読を続けていると予想もしない事が起こった。教室内の数力所から、塞き敢えぬ涙をこらえようとするかすかな声が聞こえたのである。精神を病んで暴れるエリスが、生まれてくる子どものために縫っておいた襦袢おしほを顔に押し当て、涙を流して泣く場面であった。この場面では、朗読者の私自身も胸詰まる思いを必死にこらえていた。

この時以来、「舞姫」の授業（朗読）で何人泣かせられるかが、私の授業に対する自己評価の尺度となった。明日は、『舞姫』の朗読』だという日には、書齋で朗読の練習を欠かすことがない。ある年、書齋で練習していると、妻が驚いた顔をして入ってきた。何かと思うと、「今、女の子の声しなかった？」と部屋の中を見回している。朗読の練習をしていたのだという。と怪訝けげんそうな顔をして出て行った。私は「これで明日も大丈夫だ。」とほくそ笑んだ。

高等学校教諭